九州大学大橋地区フレームワークプラン

九州大学

Introduction はじめに

福岡は、古来よりアジア、世界に向けた我が国の玄関、国際交流の拠点として、多くの渡来人や文物が往来し、繁栄してきた。1911（明治44）年、九州帝国大学が設置されて以来、福岡都市圏は西日本の拠点都市としてさらなる発展を遂げつつある。1967（昭和42）年、福岡都市圏の南に位置する大橋の地に設置された九州芸術工科大学は、技術を人間生活に適切に利用するために、技術の基礎である科学と、人間精神の最も自由な発現である芸術とを綜合し、技術の進路を決定し、その機能の設計について研究するとともに、人文、社会、自然にまたがる知識と芸術的感性を基盤とする設計家を養成することを目的としていた。

2003（平成15）年、九州大学は九州芸術工科大学と統合し、大橋地区は国立大学法人九州大学における重要な役割を担うようになり、芸術工学研究院、感性融合創造センター、産学連携センターをはじめ、最先端のデザイン拠点として、その重要性はますます高まりつつある。このフレームワークプランは、これから100年先、50年先に目指すべき九州大学大橋地区の基本的将来像を示す計画であり、日々進歩を遂げ、めまぐるしく変わる社会の要請にも柔軟に対応できるフレームを提示するものである。関係各位の深いご理解をお願いする次第である。

九州大学

INDEX

1. フレームワークプランについて
   - 1-1. フレームワークプランの目的と役割
   - 1-2. フレームワークプランの位置づけと運用
   - 1-3. フレームワークプランの対象範囲と要素
   - 1-4. フレームワークプランの構成および要素
2. フレームワークプランの前提条件
   - 2-1. 歴史的条件
   - 2-2. 上位計画と部局の概要
   - 2-3. 地理的条件と福岡市の都市計画
   - 2-4. 大橋地区周辺の概要
3. フレームワークプランの方針
   - 3-1. フレームワークプランのコンセプト
   - 3-2. フレームワークプランの方針
4. フレームワークプラン
   - 4-1. 九州芸術工科大学計画（マスタープラン）
   - 4-2. キャンパスの変遷
   - 4-3. 共生のための地域とキャンパスのゾーニング
   - 4-4. スペースグラマー　スペースプランニング
   - 4-5. キャンパスを印象づける要素の考え方

1

1.フレームワークプランについて

1-1.フレームワークプランの目的と役割
1-2.フレームワークプランの位置づけと運用
1-3.フレームワークプランの対象範囲
1-4.フレームワークプランの構成および要素

1

Section-1 フレームワークプランの目的と役割
Section-2 フレームワークプランの位置づけと運用
Section-3 フレームワークプランの対象範囲

1.フレームワークプランの目的と役割

1.1 大橋地区の将来像を明示する

フレームワークプランは、国立大学法人九州大学の敷地と建物が国民の財産であることをふまえ、九州大学学術憲章、教育憲章を実現する舞台としての大橋地区の目指すべき基本的将来像を示すものである。

1.2 2059年を目標とする

実現の目標年次を50年後の2059年とし、キャンパスの骨格を維持しつつ、日々進歩を遂げる学術分野の変化にも柔軟に対応できるようなフレームワークプランを提示する。

1.3 キャンパスの骨格を示す

マスタープランは、10～15年後のキャンパスの将来に対する目標とそれを達成するために必要な施設の内容を規定する基本的施策であるが、大橋地区では、フレームワークプランを策定することにより、それぞれのスパンで策定されるマスタープランの拠り所として、土地利用と動線を主とするキャンパスの骨格を示すことを役割とする。

2.フレームワークプランの位置づけと運用

2.1 フレームワークプランの位置づけ

フレームワークプランは、大橋地区の位置する福岡市の上位計画、または南区の基本計画との整合を図り、都市と大学双方の持続的な発展を可能にする。大橋地区は2003年10月に九州芸術工科大学と九州大学の統合によって誕生した。九州芸術工科大学は、2003年にキャンパスマスタープラン試案を学内で作成しており、本フレームワークプランは、同マスタープランを前提に基本検討事項を継承しつつ、これを敷衍的に拡充、発展させた計画として位置づけられる。

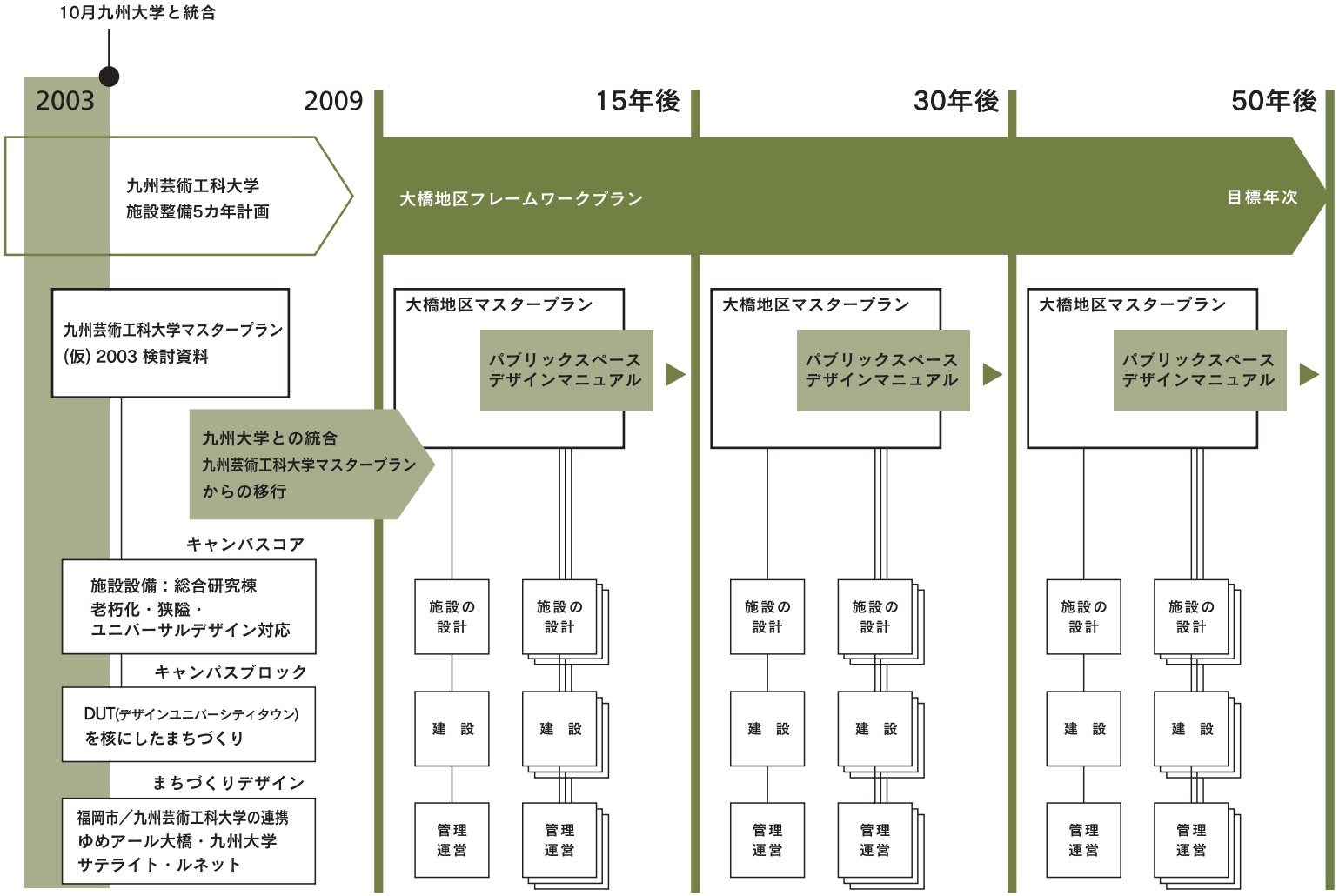
2.2 フレームワークプランの運用

本フレームワークプランの運用にあたっては、10～15年後を目標年度にするマスタープラン、各地区の基本設計、実施設計等によってその実現を目指すものであり、重要度に応じて、九州大学役員会、将来計画委員会で検討され、実施に移されることになる。

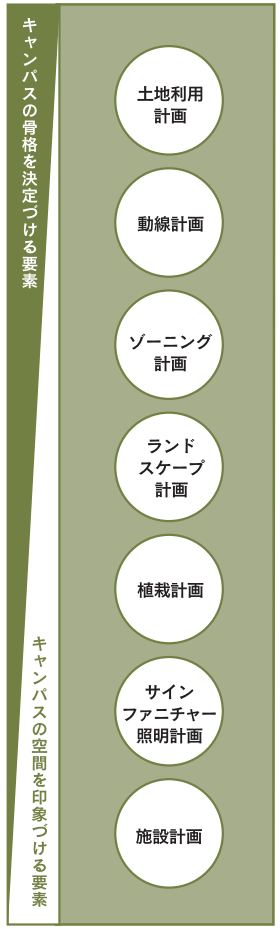
3.フレームワークプランの対象範囲

フレームワークプランの対象は、九州大学大橋地区（福岡市南区塩原4-9-1）敷地面積5.2haである。周辺を含め、まちの計画と連動したキャンパス計画も対象範囲とする。大橋地区は、伊都地区等の他キャンパスとの連携を図りつつ、副都心に立地する都市型キャンパスとして、都市と一体となった活用が期待されている。

Section-4 フレームワークプランの構成および要素 1



フレームワークプランの位置づけと運用フロー



フレームワークプランの計画対象範囲と要素

2.フレームワークプランの前提条件

2

2-1.歴史的条件
2-2.上位計画と部局の概要
2-3.地理的条件と福岡市の都市計画
2-4.大橋地区の概要

2

Section-1　歴史的条件

1．歴史的条件　九州大学大橋地区の歴史

1970 年頃のキャンパス

昭和 37 年（1962 年）

○九州芸術工科大学の設立の目的

本学は、教育基本法および学校教育法の精神に則り技術を人間生活に適切に利用するために、技術の基礎である科学と、人間精神の最も自由な発現である芸術とを綜合し、技術の進路を決定し、その機能の設計について研究するとともに、人文、社会、自然にまたがる知識と芸術的感性を基盤とする設計家を養成することを目的とする。ー＜学則＞第1条

○九州芸術工科大学の目指すもの

小池新二・九州芸術工科大学学長（当時）

九州芸術工科大学では当面、広汎な人間環境の部面を四つ（環境設計、工業設計、画像設計、音響設計）に分けて学科の編成を考えた。特色の一つは、何れも「設計」という共通の技術によって有機的に結び合わされているところにある。デザイン大学の成否は専門的領域間の協力関係が円滑に行われているかどうかにかかっているといってよかろう。(小池新二，　芸術工学の目ざすもの，　SD，pp.20-23，1970.7)

○九州芸術工科大学計画

香山壽夫・九州芸術工科大学助教授（当時）

キャンパスの設計の基本的論理は、成長・増殖の論理ではなく、コミュニケーション空間の構成の論理であると考えた。大学の空間にとっては、そこで行われる精神の交流にこそ意義があるのであって、規模が拡大していくことに大学の価値があるのではない。われわれは、凝縮した空間によって、空間単位や装置を緊密に結びつけたいと思った。そういう強い力を持った空間こそが、教師や学生の自由な交流や出会いを誘発する大学の空間である。(香山壽夫，大学計画の論理，建築文化，pp.96-98，1970.12)

昭和 42 年（1967 年）

九州芸術工科大学 開学
芸術工学部　(1学部4学科)
環境設計
工業設計
画像設計
音響設計

昭和 47 年（1972 年）

大学院芸術工学専攻科 設置

昭和 52 年（1977 年）

●大橋駅・高架化 ('78)

芸術工学研究科(修士課程)に名称変更

平成 6 年（1993 年）

博士課程 設置

平成 9 年（1997 年）

芸術情報設計学科設置

平成 15 年（2003 年）

国立大学法人 九州大学と統合
芸術工学部　環境設計学科
工業設計学科
画像設計学科
音響設計学科
芸術情報設計学科

大学院芸術工学府
大学院芸術工学研究院
感性融合創造センター
産学連携センター
大橋地区図書館
大橋地区事務局

平成 21 年（2009 年）

昭和37年　国立九州芸術大学設置期成会設立
昭和38年　国立産業芸術大学（仮称）
設置の調査に関する会議（文部省：当時）
＜中間報告＞

我が国の現状からして、東京芸術大学と全く同種の大学を設置することは困難であるばかりではなく、むしろわが国の産業界にとっては、近代産業、国際貿易等の進展のために産業デザイン、音響、放送等のいわゆる産業芸術教育の振興が、急務であるということになり、とくに九州を中心とする産業界からの強い要望と合わせて産業芸術を中心とした大学の設置という構想に発展してきたのである。／産業芸術関係学部学科を構成する場合の科学技術と芸術との関係：どちらを中心とするかについては、議論の分かれるところであったが、結局、芸術を中心とし、工学関係（科学技術）については教育課程編成の際にじゅうぶん考慮するのがよいという結論になった。

抽出されるキーワード

社会貢献
信頼（研究・人）
産業
技術の人間化
人間環境
環境と適応性
科学と芸術
（学際領域・境界領域）
ユーザーと感性
設計・デザイン
サステナブル
コミュニケーションデザイン
メディアアート・メディアデザイン
心理・探求
カオス・混沌
バウハウス
開かれた集中型の連続

Section-2 上位計画と部局の概要 2

2．上位計画と部局の概要

九州大学学術憲章

開かれた大学として、その研究成果を学外に開示し、さらには活発な情報発信や人的交流、諸研究機関や産業界との連携に努めながら、学術研究の国際的拠点となることを目指す。

九州大学教育憲章

○日本国民のみならず、世界中の人々からも支持される高等教育を一層　推進。
○アジアをはじめ、広く全世界で活躍する人材を輩出し、日本及び世界の　発展に貢献。
○アジアをはじめ、全世界の人々の文化的、社会的、経済的発展に寄与。

九州大学の目指す研究・教育

○世界最高水準の教育研究拠点（COE）形成
○実績に基づく新科学領域への展開
○歴史的・地理的な必然性が導くアジア指向

大橋地区　現在の部局の概要

芸術工学研究院

技術を人間生活に適切に利用するために、技術の基盤である科学と人間精神の最も自由な発現である芸術を統合し、技術の進路を計画し、その機能の設計について研究するとともに、人文、社会、自然にまたがる知識と芸術的感性を基盤とする高次の設計家を組織的に養成。芸術工学の目標である「技術の人間化」を達成するため、先端的、独創的研究を行い、勝つ指導的役割を果たし得る総合的な設計能力を備えた人材を組織的に育成。日本、アジア、世界でのデザイン活性化を基軸として、社会と産業の持続的な発展に貢献することを教育理念に、デザインストラテジー能力を有する高度専門職業人及び研究者などの人材を組織的に育成。

感性融合デザインセンター

人間の芸術的感性を科学的にとらえ、表現する高度な教育研究を行い、諸科学との融合により新しい価値を創造する。九州大学の広範な学術分野に亘る　高度の研究力と九州芸術工科大学の優れた芸術・感性・デザイン分野の教育研究力を　融合させ、新な研究領域を開発・展開する。

産学連携センター（デザイン総合部門）

芸術工学分野の高度で幅広い専門家の能力を活用してデザイン分野の振興をはかり、さらに九州大学全学の幅広い科学や技術分野との共同を推進し、人間のニーズを踏まえた感性豊かな開発研究を行う。

大橋地区　将来の新たな機能

・新専攻分野の社会連携機能
・九州大学の都市型サテライト機能や他キャンパスのブランチ機能　　など

抽出されるキーワード

教　育
技術の人間化
高度・デザインの専門性
高次のデザイナーの育成
幅広い知識と論理性
芸術的感性と論理性

研　究
世界最高水準
最先端デザイン拠点
研究・開発
世界レベルのプロジェクト
流動性・多様性

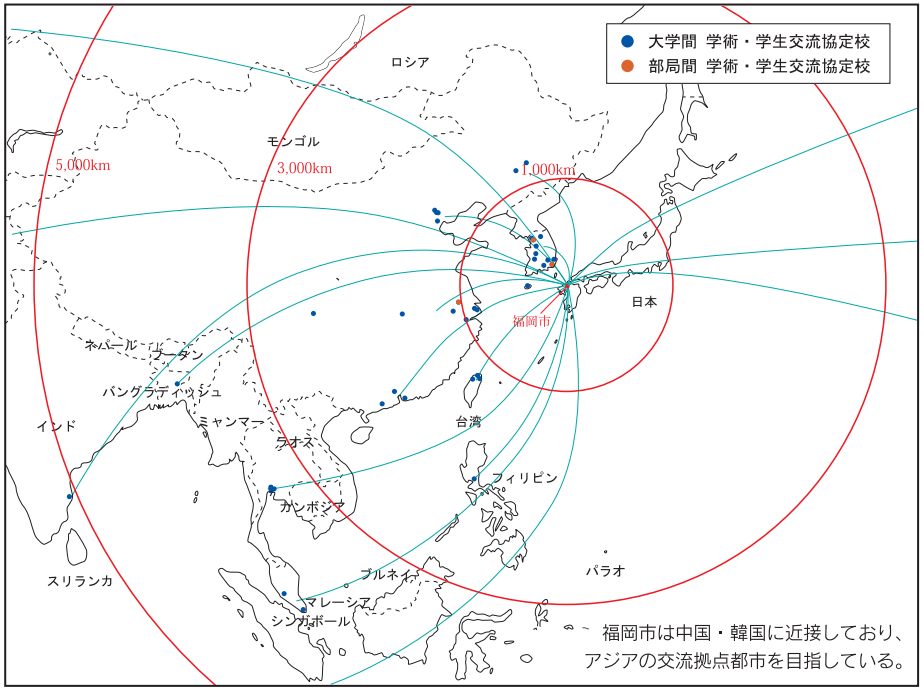
社会貢献
拠点・中核
地域との連携・共生
多様なセクターとの価値交換
新しい価値の提供

国際貢献
開かれた・交流
九州・西日本・アジア・世界

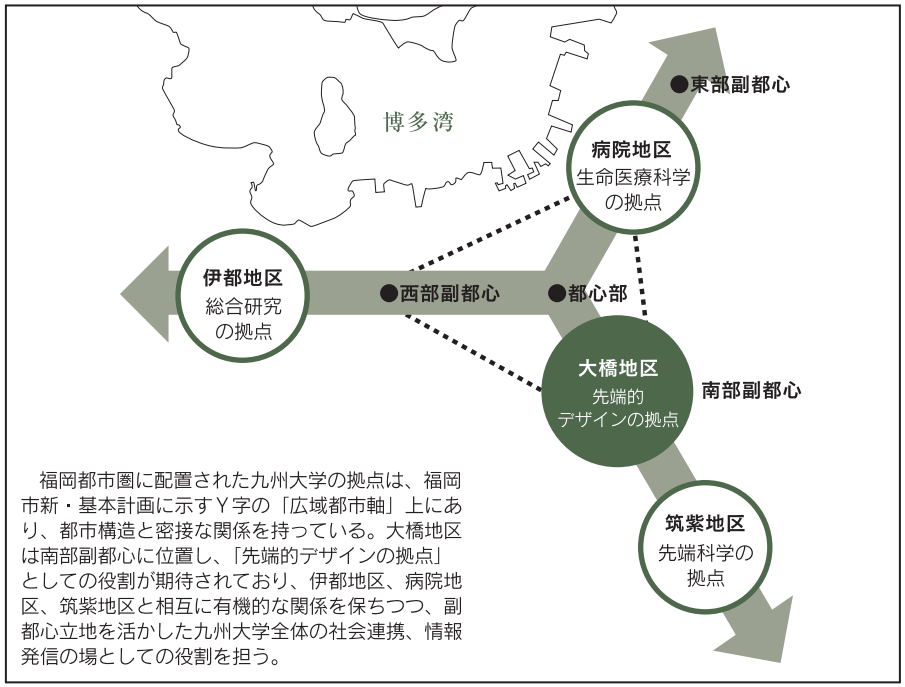
2

Section-3 **地理的条件と福岡市の都市計画**

3.地理的条件



アジアと九州大学



福岡都市圏に配置された九州大学の拠点は、福岡市新・基本計画に示すＹ字の「広域都市軸」上にあり、都市構造と密接な関係を持っている。大橋地区は南部副都心に位置し、「先端的デザインの拠点」としての役割が期待されており、伊都地区、病院地区、筑紫地区と相互に有機的な関係を保ちつつ、副都心立地を活かした九州大学全体の社会連携、情報発信の場としての役割を担う。

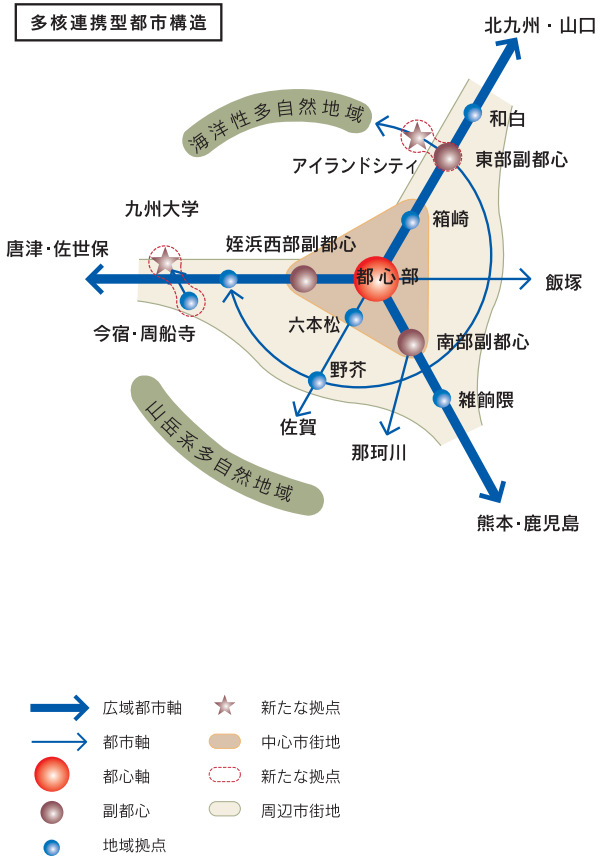
福岡市の都市構造と九州大学

Section-3 地理的条件と福岡市の都市計画

2

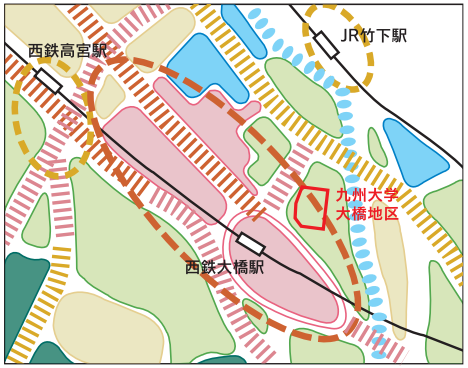
4.福岡市の都市計画

■都市構造図



出典：福岡市新・基本計画（全市編）

■福岡市都市計画マスタープラン



凡例

南部副都心
西鉄大橋駅を中心として、広域的な交通機能、多様な商業・業務施設・公共施設等が集積し、活発な交流が行われる南部地域の核となるまち

副都心核形成ゾーン
- ●副都心としてふさわしい機能　商業・業務機能、文化機能等)の誘導と連携性のある街並みの形成
- ●交通結束機能強化
- ●建物景観の誘導や緑化等による魅力ある都市景観の形成
- ●安全で快適に歩ける歩行者空間の確保
- ●駅と周辺施設等へのアクセス機能の強化

副都心連携ゾーン
- ●主要な施設間をネットワークする歩行空間の充実公共
- ●公益・文教施設立地の特性を活かした街並の形成

河川緑地軸
那珂川等の河川敷と周辺の住宅地等で形づくられる潤いのある水辺空間

低中層住宅ゾーン
鉄道駅や幹線道路に近隣した利便性の高い低層住宅と中層住宅が共存したまち

那珂川の水辺や地形条件を生かした緑豊かな潤いある低層住宅と中層住宅等が調和するまち

商業軸
商業サービス施設、公共施設、文教施設等が立地し、都心部の玄関口となる活気あふれる景観を持ったまち

沿道主軸
中高層住宅や商業サービス施設等が立地し、背後の低層住宅地やため池などの自然条件と調和した魅力ある街並みをもったまち

沿道副軸
日常生活に必要な商業施設や、中層住宅・高層住宅等が連続し、魅力的な景観を持った賑わいのあるまち

九州大学大橋地区は「南部副都心」に位置し、東側は「河川緑地軸」、西側は「副都心連携ゾーン」に近接している。

出典：福岡市都市計画マスタープラン

2 Section-3 地理的条件と福岡市の都市計画

南区のまちづくり

「人と自然がふれあい、
文化が息づく暮らしのまち」
～いきいき南区～

まちづくりプラン
（7項目のうちの「プラン5」）

「人・まち・大学をむすびます」

大学の集積を活かしたまちづくりの推進

大学・短大の持つ施設や人材の活用
地域に開かれた大学づくりの促進

大橋地域

「みんなが集い、にぎわいと魅力のあるまち」

出典：福岡市新・基本計画（全市編）

都市機能が集積し、人が集い、にぎわいのあるまち
歴史と緑が薫るやすらぎのあるまち
大学や若者の力を活かし、活気のあるまち

まちづくりの方向

拠点機能の強化

（南部副都心にふさわしい文化・
交流活動を行う拠点機能の整備）

やすらぎ空間の整備

（那珂川河畔整備や身近な緑や
樹木の保存による、やすらぎ空間の形成）

大橋駅周辺の環境整備

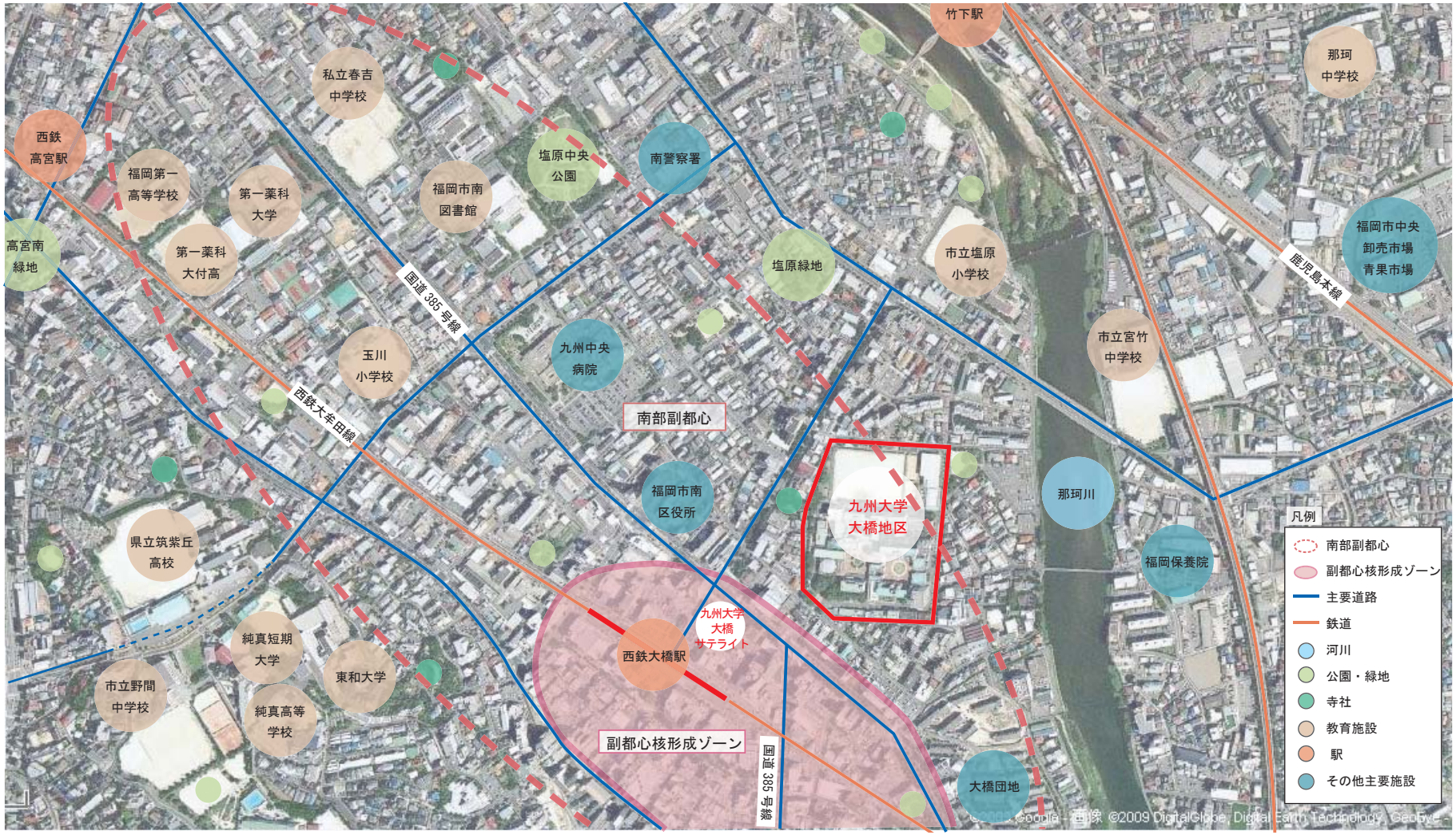
出典：福岡市新・基本計画　南区基本計画

**抽出される
キーワード**

アジア・世界
知材・人材
指導・交流
ネットワーク・拠点
都市機能の集積
自然・環境
やすらぎ
共生
活気・にぎわい
文化

Section-4 大橋地区の概要

2



3

3.フレームワークプランの方針

3-1.フレームワークプランのコンセプト
3-2.フレームワークプランの方針

3 Section-1 フレームワークプランのコンセプト

1. フレームワークプランのコンセプト

前提条件より抽出されたキーワードから、先端的デザインの拠点である大橋地区におけるフレームワークプランのコンセプトを導くとともに、フレームワークプランの方針を組み立てる。

前提条件(2章)より抽出されたキーワード

社会貢献
信頼(研究・人)
産業
技術の人間化
人間環境
環境と適応性
科学と芸術(学際領域・境界領域)
ユーザーと感性
設計・デザイン
サステナブル
コミュニケーションデザイン
メディアアート
メディアデザイン
心理・探求
カオス・混沌
バウハウス
都市機能の集積
開かれた集中型の連続
高度・デザインの専門性
高次のデザイナーの育成
幅広い知識と論理性
芸術的感性と論理性
世界最高水準
最先端デザイン拠点
研究・開発
世界レベルのプロジェクト
流動性・多様性
拠点・中核
地域との連携・共生
新しい価値の提供
開かれた・交流
九州・西日本・アジア・世界
知材・人材
指導・交流
ネットワーク・拠点
自然・環境
やすらぎ
共生
活気・にぎわい
文化

大橋地区
先端的デザインの拠点
=

抽出したキーワードから

世界的ムーブメント
アジア・世界を視野に入れたグローバル性
人材育成(知識・技術・人間性)の的確性
デザイン拠点としての役割と信頼性
地域との連携、社会貢献・国際貢献
新たな価値をつくりだす文化性
共生するデザインの社会性
蓄積と発展、ゆるがない部分と柔軟性
学びの場、研究の場としての快適性
都市と共生するキャンパス
環境と適応性
実演芸術
を備えた『デザイン文化創世の場』

=

「デザイン文化」を育み、
「デザイン文化」を守るところ

人材の育成
地域への貢献と連携
情報発信と多面的交流
芸術工学のDNAの継承と新しい社会・環境への対応

先端的デザインの拠点

実験実践 技術の人間化の実験・実践フィールド
都市と大学が一体化した先端技術の拠点

育成 論理的思考に基づいた高次デザイナーの育成拠点
高度職能人として、芸術的感性だけでなく、科学的思考に基づいた人材、デザイナーを育成する拠点具体化の手順・手続きを理解し、デザイン文化を次世代に伝える

集積 知のアーカイブ
アジア、世界におよぶ有形・無形の技能やデザインを記憶し、次の世代に伝えるための「知のアーカイブ」としての拠点

発信 社会に開かれた、先端的デザインの発信拠点
社会との接点を有し、つねに新しい先端的デザインの方向性を発信しつづける拠点

Section-2 フレームワークプランの方針 3

フレームワークプランのコンセプトフレーズ

デザインと文化・芸術の産土（うぶすな）

先端的なデザインの生まれるところ。
そして、デザインによって新たな文化・芸術が育まれるところ。
デザインと、都市・社会とのインターフェイスとなる場。
そして、そこにデザイン文化が創世され、発展し、それを守り、伝えていく。
デザイン文化の故郷となる場。

別案

融合の作用点
共生と創造の場
響きあう広場
感性の揺籃
都市響成キャンパス
創造の広場
技術と人のまほろば

2．フレームワークプランの方針

1	「技術の人間化」の実験フィールド・芸術工学探求	・新たな時代に対応した「技術の人間化」の実験、実践を通じて、芸術工学研究の環境をめざす ・都市とともにイノベーションを生み出す環境をめざす ・都市のバーチャル・ネットワークとリアリティ・ネットワークを生かしたキャンパス
2	社会活動・学内活動との連携	・大学空間を多目的に活用できる環境をめざす ・都市と大学の未来のポテンシャルをつくる環境をめざす ・総合大学の多様な専門分野が連携して研究を行い、そのプレゼンテーションを行う環境をめざす
3	デザイン文化の集積	・有形・無形のさまざまなデザインを記憶し、次世代に伝える環境をめざす ・デザインのクリエーションやプロデュースを行う環境をめざす ・学内外の人々が、集積されたデザイン文化に容易にアプローチできる環境をめざす
4	デザイン情報の発信	・九州、日本、アジア、世界をつなぎ、デザインに関する情報のプレゼンテーション、デモンストレーションを行うとともにインタラクティブな活動の拠点となる環境をめざす
5	多様なコミュニケーション－通信から通心－	・産官学連携、地域連携、国際連携を積極的に展開し、社会に開かれた環境をめざす ・キャンパスにおける多様なコミュニケーションが活性化する環境をめざす ・学内連携研究のインタラクティブな拠点となる環境をめざす ・伊都地区、病院地区、筑紫地区と相互に有機的な関係を保ちつつ、副都心立地を活かした九州大学全体の社会連携、情報発信の環境をめざす。
6	都市との共生	・ユビキタスネット社会に対応し、都市・地域と共存・共生できる環境をめざす ・学生、教職員、来訪者等より多くの利用者が活動しやすい、利便性の高い環境をめざす ・防犯・安全性能と防災性能を備え、災害時の拠点施設となる環境をめざす ・ユーザーの感性、エンタテイメントなどを含む先端的情報が集積する環境をめざす
7	サステナブル・キャンパス	・急激に変化する社会の要請にも柔軟に対応できる環境をめざす ・生態系への配慮、自然エネルギーの活用、環境負荷物質の排出削減など地球環境に配慮する環境をめざす ・新たな整備手法など、多様な技術を活用しつつ、質の高い環境をめざす

将来想定される施設案（課題）

○デザインミュージアム
○オープンエアミュージアム
○デザインギャラリー
○デザインライブラリー
○デザイントレーニングセンター
○デザインホテル
○ゲストハウス
○ユニバーシティーコンプレックスタウン
・オープンカフェ、レストラン、パブ
・画材、デザイン用品、生活雑貨
・ジム、室内プール　など
○ユニバーシティーコンプレックスタウンホール
・デジコンシアター
・テレビスタジオ、WEBキャスティング
・ミニFM局
・ミニ出版、印刷
・先端技術のショールーム
・工作工房
・プロ向けの市民講座教室
○九州大学他地区の都市型情報発信・社会連携施設
○都市型新移動体の実験場
・ニュービークル　など
○サステナブルフィールド
（自然エネルギーの利用による環境学習）
○実験・実践の場（実験内容例）
・都市型コンテンツ
・ユビキタス、ロボット、エンタテイメント
・マスコミュニケーション
・食、ファッション、照明
・動体のシリアスゲーム
・スポーツトレーニング、酸素コントロール
・介護、リハビリ　など

4.フレームワークプラン

4

4-1.九州芸術工科大学計画(マスタープラン)
4-2.キャンパスの変遷
4-3.共生のための地域とキャンパスのゾーニング
4-4.スペース・グラマー　スペース・プランニング
4-5.キャンパスを印象づける要素の考え方

4

Section-1 **九州芸術工科大学計画（マスタープラン）**

1．九州芸術工科大学計画（マスタープラン）

大橋地区のキャンパスは、九州芸術工科大学創設時に作成された「九州芸術工科大学計画（マスタープラン）」に基づき、計画された。

九州芸術工科大学計画（マスタープラン）は、「コミュニケーション空間の構成」を基本的論理としている。

1-1.地域とのコミュニケーションの創出

塀によって囲まれた閉じた空間ではなく、都市の諸施設と積極的に結びつき、外部に開かれたキャンパスとして考えている。

1-2.キャンパス内コミュニケーションの創出

キャンパスが「自由で活力に満ちたコミュニケーションスペースの連続」となることを目指し、コミュニケーションを段階的に分け、空間構成を行っている。

1）フォーマルコミュニケーション：講義や、研究室における形式を持った場

2）インフォーマルコミュニケーション：学生や教師の談話や自由な討論の場

3）フリーコミュニケーション：キャンパスでの全く自由な集まりや交流の場

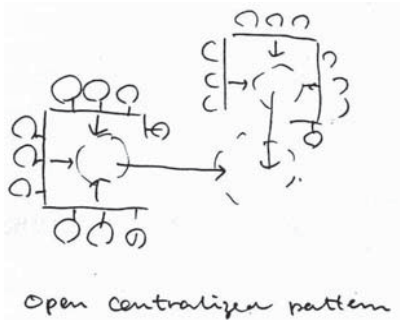


図4.1-1　開いた集中型
大学における自由で活力に満ちた「コミュニケーション・スペース」が完全に閉じてしまうのではなく、他と結びつき、あるいは外部に開かれている。（※）

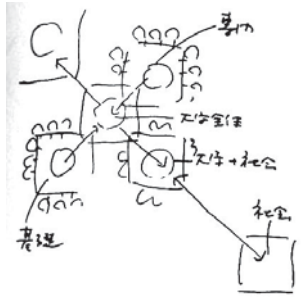


図4.1-2　フリー・コミュニケーションスペースの構成
「専門学科の一群」と「基礎教育の一群」が広場で一つにつながり、さらにそれは「講堂」「管理部」によって囲まれるより社会的な広場につながっている。そしてそれはさらに駅前広場に結ばれている。すなわち、フリーコミュニケーション・スペースは決して単一なものではなく、社会的広がりによって、多くの段階構成を持つのである。（※）

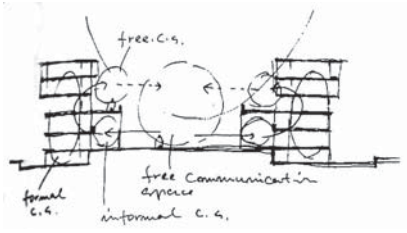
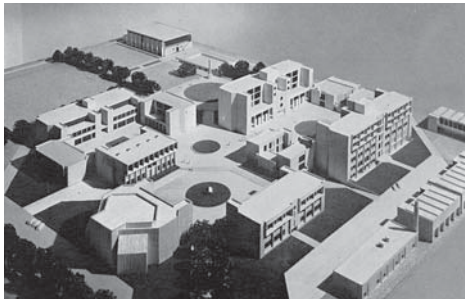


図4.1-3　コミュニケーション・スペースの断面構成
「フリー」「インフォーマル」「フォーマル」のスペースという３段階の空間がそれぞれはっきりとした領域を持ちながら、スムーズに連続するように考えられてる。（※）

※図4.1-1～3の説明文は「SD1970年7月号 コミュニケーションスペースの構成としてのキャンパス：香山壽夫」より抜粋



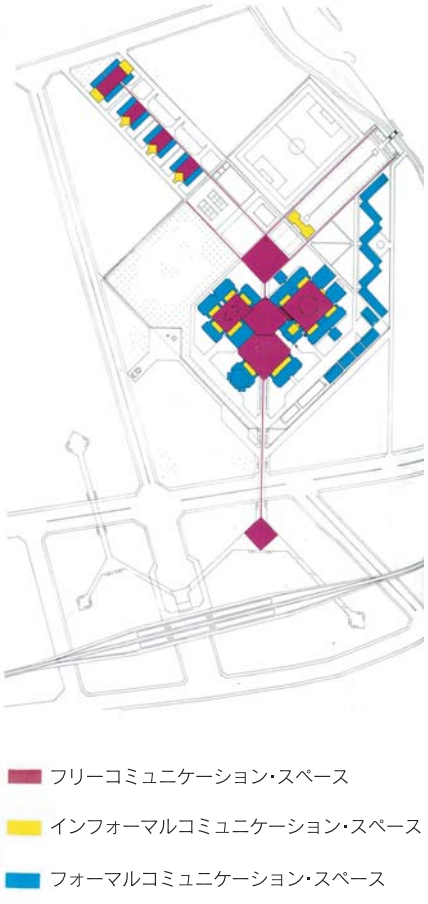


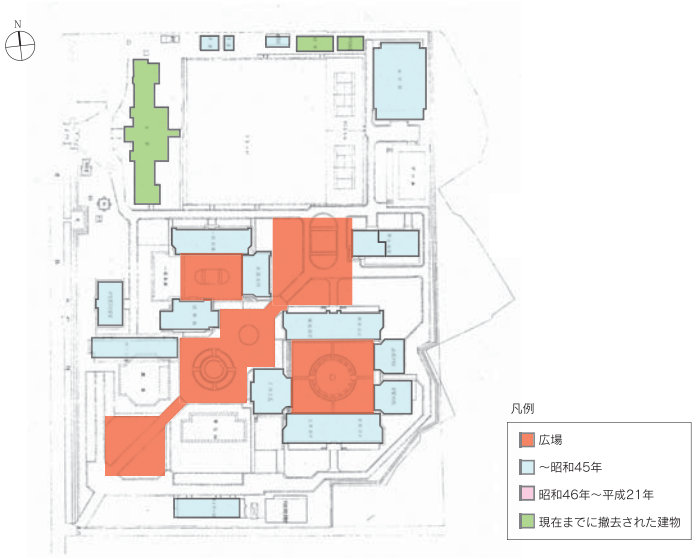
図4.1-4　コミュニケーションスペースの配置

Section-2 キャンパスの変遷 4

2. キャンパスの変遷

現在の大橋地区の敷地には、1927（昭和2）年福岡県筑紫中学校（後の筑紫丘高校）が開校し、その後、1949（昭和24）年福岡学芸大学（後の福岡教育大学）へ転用された。1962（昭和42）年の九州芸術工科大学開学当初は、福岡教育大学の施設がそのまま利用されており、1969（昭和44）年から前項の九州芸術工科大学マスタープランに基づき整備が開始された。

1970



1972（昭和47）年頃のキャンパスマスタープランを基に第一期工事が行われた。一つのオープンスペースを専門教育棟群、一般教養棟群それぞれが囲み、そのオープンスペースが連続する空間構造である。敷地周辺との境界は未整備のところが多い。引き続き、付属図書館や管理棟、多次元実験棟などが増築されていった。

2009

2009（平成21）年現在のキャンパス大学院や学科の増加などによる学生と教職員の増加、教育・研究環境の充実などにより、施設の整備がなされた。当初の連続するオープンスペースと施設配置の考え方は薄れ、敷地境界いっぱいに施設が建ち並び、直線で高いフェンスを設けるなど、周辺環境に対してやや閉鎖的な印象となっている。

4

Section-3　**共生のための地域とキャンパスのゾーニング**

1.地域におけるキャンパスの位置づけ

キャンパスの位置する福岡市南区大橋地域は、福岡市の副都心として位置づけられている。南区は、「人と自然がふれあい、文化が息づく暮らしのまち」を将来像としており、大橋地域は、「みんなが集い、にぎわいと魅力のあるまち」としての発展が期待されている。「大学の集積を生かしたまちづくり」の拠点としても重要な地域であり、「ひと・まち・大学を結ぶ」結節点としての役割を担う。交通結節点である西鉄大橋駅と周辺の商店街を含むエリアを、副都心核形成ゾーンと位置付けており、九州大学大橋地区が隣接する。西鉄大橋駅から那珂川へと抜ける都市軸に沿って、都市と大学が機能・空間ともに、有機的な共生を図り、さらに発展することが望まれている。

2.地域のゾーニング

大学と地域が共生していくためにキャンパスの周辺地域をゾーニングすると、(1)交流ゾーン、(2)自然共生ゾーン、(3)副都心連携ゾーンというゾーニングが考えられる。

(1) 交流ゾーン

大橋地区の西側に展開するゾーンである。地域住民、学生、教職員、企業その他、様々な利用者間の、多国籍な文化の交流の場を形成するとともに、「技術の人間化」が対象とする人間そのものと向き合う場として位置づけられる。

(2) 自然共生ゾーン

大橋地区と那珂川の自然環境を結ぶゾーンである。地域の人々が自然にふれあえる機会を提供するとともに、環境教育やボランティア・コミュニティ育成の場として位置づけられる。

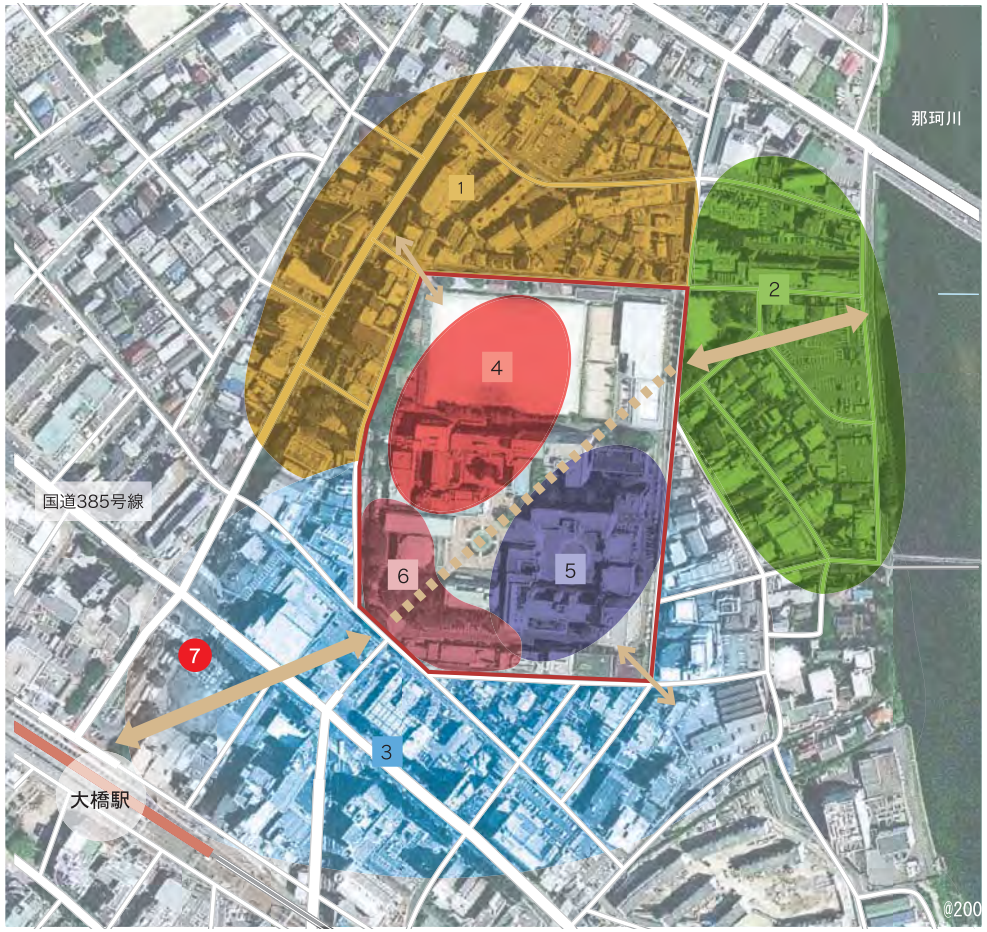
(3) 副都心連携ゾーン

九州大学大橋地区と西鉄大橋駅周辺を結ぶ都市軸を含むゾーンである。公共交通を利用する歩行者の主動線となっており、民間の商業・業務施設や九州大学大橋サテライトが立地している。都市的利用を誘発し、生活利便性を享受できる大学の町として位置づけられる。

3.キャンパスのゾーニング

九州大学大橋地区内は、(1)ウエスト・ゾーン、(2)イースト・ゾーン、(3)メインエントランス・ゾーンで構成する。

1 交流ゾーン
2 自然共生ゾーン
3 副都心連携ゾーン
4 ウエスト・ゾーン
5 イースト・ゾーン
6 メインエントランス・ゾーン
7 九州大学大橋サテライト

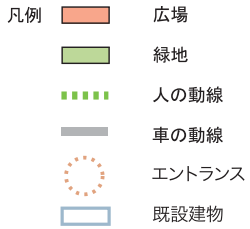


Section-4 **スペース・グラマー** 4

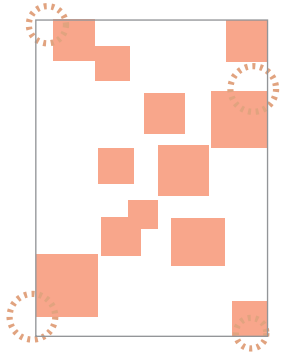
大学運営や社会環境の変化に柔軟に対応するため、固定した空間像とせず、フレキシブルな計画を提示する。

ここでは「オープンスペース」「動線」「緑化」「ゾーニング」のフレームの考えを定め、空間構成や土地利用の考え方、つまり空間構成の文法（グラマー）を提示する。

キャンパス敷地は管理しやすい規模であり、市街地と連坦する立地を考え合わせ、「都市と共生する開放的キャンパス空間」をめざす。

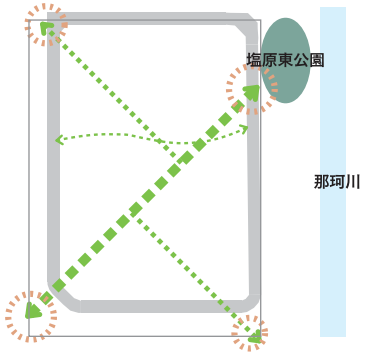


1.オープンスペース



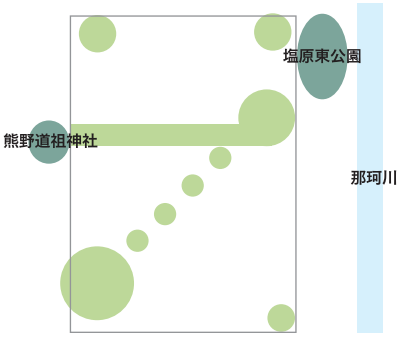
・九州芸術工科大学計画（マスタープラン）において、閉じつつ連続するコミュニケーションスペースと位置づけられている。そのオープンスペースは、屋外はもとより屋内にも展開しながら、キャンパス空間構成の骨格を形成する。
・敷地4ヶ所に周辺市街地と繋がるゲート広場を設ける。

2.動線



・南西から北東に貫く軸線を中心軸とし、敷地隅の広場に向かうサブの軸線を設定する。それらの軸線は歩行者の動線を示している。中心軸は敷地北東部に隣接する塩原東公園からさらに那珂川に向かう。
・車輌は敷地外縁部を巡る景観に配慮した外周道路からのアクセスとし、現状の隅角部からの入構を排すると共に歩車を分離する。敷地の北と東の外周道路は、隣接して走る一般道路と連携して歩車にとってともに安全で豊かな街路空間を創造する。
・敷地中央を東西に走る歩車共存道路は、緊急車両等の通行程度にとどめ緑豊かな、歩行者空間とする。

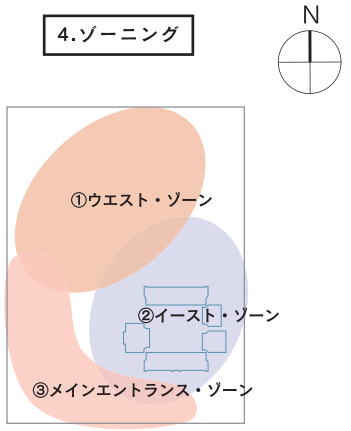
3.緑化



・敷地の南西から北東に向かって緑化度を高め、那珂川河畔の環境共生ゾーンとの連携をはかるとともに、屋上緑化や壁面緑化等環境に配慮した緑化に努める。

また、緑豊かな熊野道祖神社と塩原東公園から那珂川河畔を繋ぐ、敷地中央を東西に走る歩車共存道路をグリーンベルトとする。

4.ゾーニング

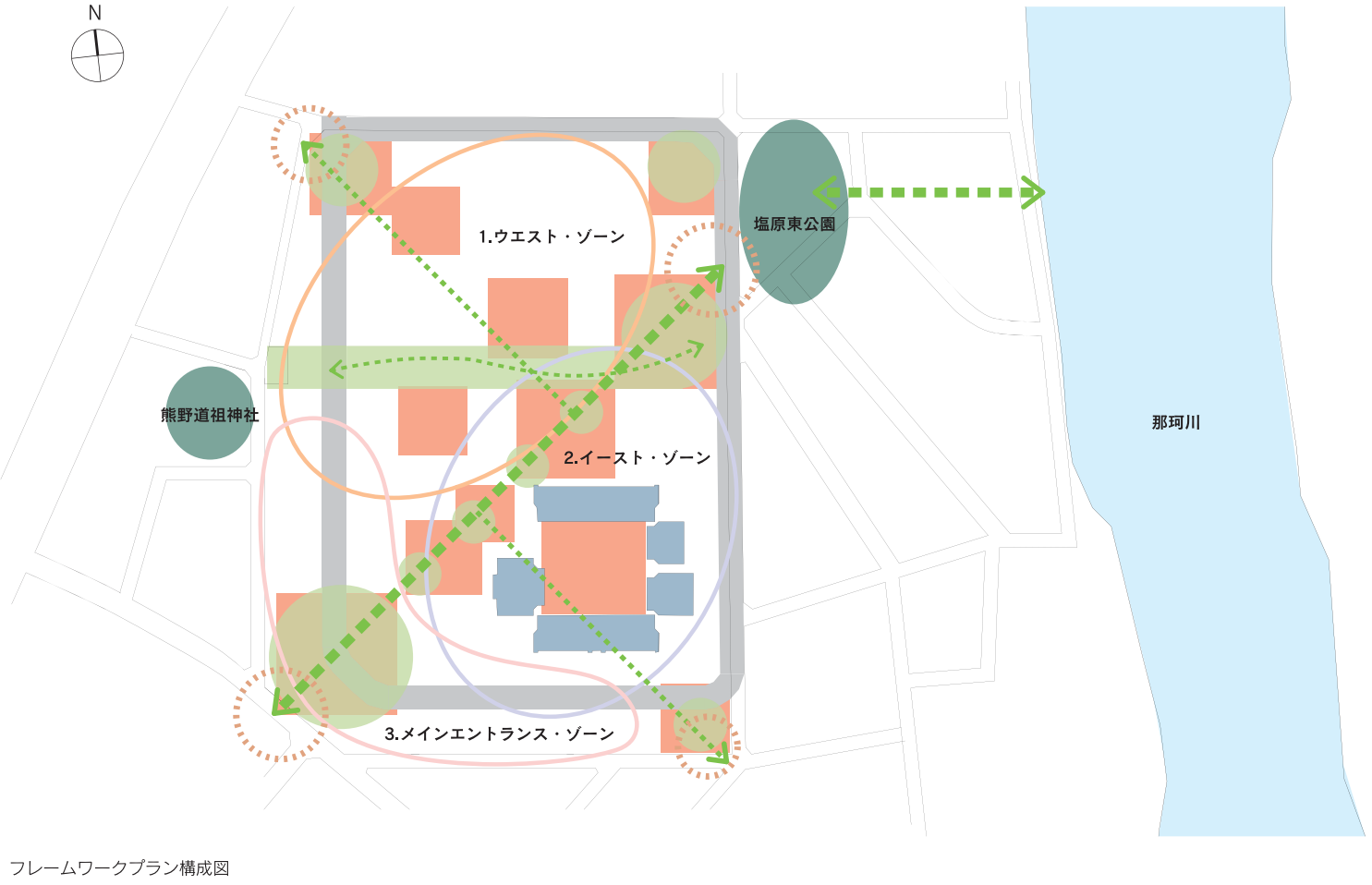


①ウエスト・ゾーン：キャンパス内に設定された都市軸の西側に展開するゾーンである。先端的デザインの発展に寄与する知財を集積し活用するとともに、外部の利用者を受け入れ、産学連携、新産業形成プロジェクトを推進、育成するゾーンとして位置づけられる。
②イースト・ゾーン：キャンパス内に設定された都市軸の東側に展開するゾーンである。大橋地区における専門の研究教育を行い、先端的デザインに貢献する人材を育成するゾーンとして位置づけられる。
③メインエントランス・ゾーン：メインエントランス（正門）を含み、キャンパス南西部に展開するゾーンである。社会に向けた大学の顔として、境界部には、外部の利用者も受け入れる社会連携施設、民間施設等の導入をはかるゾーンとして位置づけられる。

4 Section-4 スペース・プランニング

「オープンスペース」「動線」「緑化」「ゾーニング」を重ね合わせ、フレームワークプラン構成図を提示する。

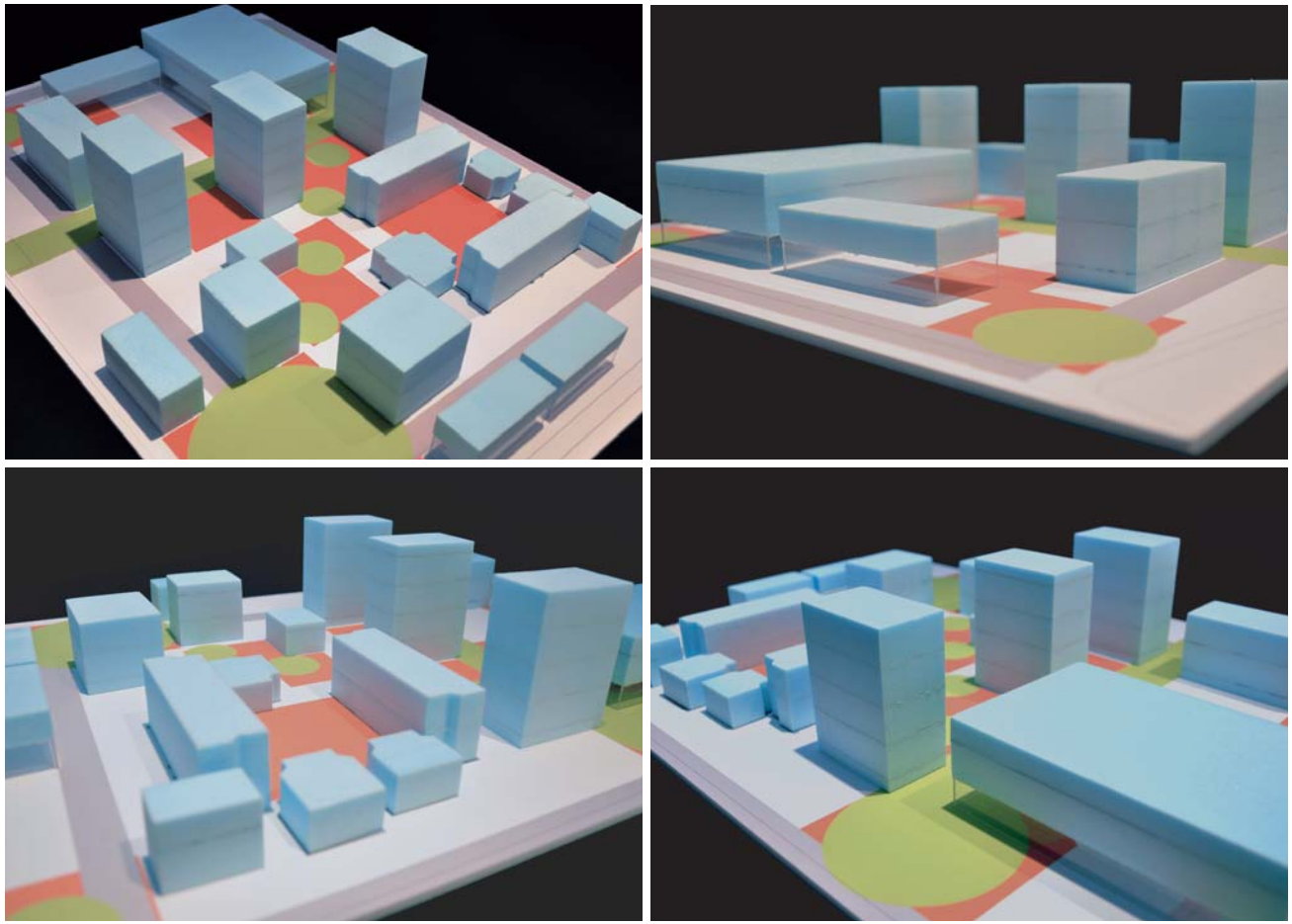
(1)ひとまとまりの閉じたオープンスペースが連続する構成とする。
(2)キャンパス周辺への影響に配慮して高層化を図り、将来の施設利用に留意する。
(3)キャンパス創設時に建設された５棟（香山壽夫設計、約10,000m2）を保全、活用する。
(4)グラウンドを施設用地として活用するとともに、オープンスペースと外周道路を確保する。



フレームワークプラン構成図

Section-4 スペース・プランニング 4

スペース・グラマーを基にした施設構成イメージ



広場及び駐車場を建替スペースとする高層案

4

Section-5 **キャンパスを印象づける要素の考え方**

フレームワークプランで扱う要素の中で、キャンパスの空間を印象づけるのは、ランドスケープ・植栽計画、サイン・ファニチャー・照明計画、施設計画である。目標年次までの時間の経過のなかで、時代のニーズや情報の変化などに柔軟に対応できることが必要である。また、利用者が身近に接するため、利用者の特性を把握し、すべての人に配慮したユニバーサルデザインであることが重要である。

アイデンティティー計画

フレームワークプランは目標年次が半世紀に及ぶ長期計画であり、プロジェクトを確実に推進し、その求心力を持続させるには、アイデンティティー・システム（イメージの一貫性を持たせる方法）を活用することが効果的である。

ランドスケープ・植栽計画

都市型キャンパスとしての景観づくり

・地域景観をリードしさまざまな交流が生まれる

創造性を誘発する景観づくり

・まちなかアート、オープンエアミュージアム など

潤いのある緑豊かな環境づくり

・緑被率、透水率等の設定とキャンパス緑化の推進

サステナブルな環境づくり

・太陽、水などの自然エネルギーの活用と環境学習

管理面、安全面に配慮した環境づくり

サイン・ファニチャー・照明計画

空間構造と動線に応じたシステムづくり

機能性と演出性の高い装置づくり

サイン計画の留意点

・情報の連続性（案内＞誘導＞定点）と表記ルールの統一

・情報の変化や技術の進歩への対応

ファニチャー計画の留意点

・設置される場所や空間のボリューム、用途を考慮する

・親しみやすさや利用しやすさを考慮する

照明計画の留意点

・「防犯性」「安全性」の確保と「ライトアップ」などにより夜の表情を演出する

・周辺環境や樹木への光害や省エネに配慮する

Section-5 キャンパスを印象づける要素の考え方

4

施設計画

デザイン文化を育み、
発信するための環境づくり

創立時の空間づくりの理念を継承する

オープンスペースを持った
集中型空間の連続

・オープンスペースに向かって施設が開く集中型空間
・その集中型空間が連続して配置される

コミュニケーションを
段階的に分けた空間構成

・フォーマルコミュニケーション・インフォーマルコミュニケーション・フリーコミュニケーションが平面的にも立体的にも構成された施設をめざす

すべての人に快適で美しい施設

・ユニバーサルデザイン・地域景観をリードする施設をめざす

ストックを活かした施設計画

サステナブルな施設

・自然エネルギーの活用、屋上緑化、環境負荷物質の排出削減、リサイクル、など地球環境に配慮する施設をめざす

安全で安心できる施設

・防犯・安全性能と防災性能を備え、災害時の拠点施設となる施設をめざす

将来の施設更新に対応できる空間構成

現況とフレームワークプラン

		現況	フレームワークプラン
年		2009年	2059年
計画人口定員	学部生	702人	
	修士課程	325人	
	博士課程	126人	
	教職員	113人	
	合計	1,266人	2,000人 ※交流人口を含む
敷地面積		52,814m2	52,814m2
延床面積		39,962m2	80,000m2
容積率（第一種住居地域200%）		76.0%	150.0%
駐車場		90台	200台

Epilogue おわりに

九州大学は、「都市と大学」という視点に立って福岡市との連携をはかり、100年、50年の長期にわたるフレームに沿った施設整備を進めることを構想しており、大橋地区フレームワークプランはその重要な一翼である。

大橋地区は、九州大学における「先端的デザインの拠点」としての役割が期待されており、研究、教育はもちろん、伊都地区、病院地区、筑紫地区と相互に有機的な関係を保ちつつ、副都心立地を活かした九州大学全体の社会連携、情報発信の場としての役割が期待される。さらには、今後増加する留学生の教育や海外の大学との国際連携も課題となる。

大橋地区で学ぶ学生はもちろん、研究者、教職員、学外からの訪問者、地域の皆様が愛着を持ち続け、地域の誇りとなり続けるキャンパスをめざして、様々な知恵を結集できることを願う次第である。

九州大学大橋地区フレームワークプラン